

古典の普及活動への取り組み

小山 順子（国文学研究資料館・准教授）

注：職名は報告当時。現職は京都女子大学・教授。

はじめに

本日、二つ目の報告として私から「古典普及活動への取り組み」という題でご報告をしたいと思います。この共同研究の代表は私自身ですが、敢えて私が本日二つ目にご報告するのは、理由があります。この「初等中等学校における古典教育」研究会の第1回は、2015年3月にありました。その時に、鶴見大学の久保木秀夫先生と当館の入口敦志准教授と山下則子教授にお話しいただき、小学生向けの古典教育についての実践報告をお聞きしました。その時は小学生を対象にした古典教育というものを、私自身が全く経験していなかったため、感銘を受けながら聞くだけでしたが、その後、皆さんからお聞きした話を、私が実践する立場になりました。第1回の報告を聞いた実践報告として、最終回の最後にお話をしようということで、この順番にしました。

前置きは以上でお話を始めたいと思います。今年度（2017年度）、私は当館の企画広報室長を務めています。企画広報室の前身であった広報出版室に配属されたのが2年前で、今年度から展示企画室と広報出版室とが統合され、企画広報室という一つの室ができ、その室長を務めています。

企画広報室には日々、館外から様々な取材や企画の申し込みが寄せられます。毎年恒例となっている催しもありますが、イレギュラーに入るものも少なくはありません。特に当館は現在、大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（歴史的典籍NW事業）」に取り組んでいます。こちらとの関わりから、事業成果を社会一般へと還元することが強く求められてもいます。

私は、このネットワーク事業の成果発信事業グループにも所属している関係もあり、成果発信に効果的、かつ必要なものは何かということを探求していき、古典普及活動に使用するテキストやテクニック、コンテンツを雛形として作る必要を感じていました。そこで今年度1年間をかけ、こうした企画広報活動を整理した上で、雛形作りに取り組んでいるところです。そのため、今年度に持ち込まれた一般向けの広報や企画には、できるかぎり全てに私に関わる形で進めています。

この報告は、国文学研究資料館の企画広報室の活動、および一般向けの社会還元活動、普及活動の報告としてお聞き下さい。

1. 2017年度企画広報室活動について

2017年度上半期がそろそろ終了しようとしています。2017年4月から8月まで、私

がなんらかの形で関わった企画広報関連の普及活動をまとめ、どういふことを国文学研究資料館でしているかという活動の紹介も兼ねてご説明していきたいと思ひます。

まず、「初めてのくずし字で読む百人一首」という一般向けの講座があります。これは、全8回で、当館の古典文学を専門とする教員のリレー講義で行われているものです。毎回3～4首を読み進めていまして、今年度が3年目です。今年あと残すところ1回ですが、それで100首全部が読み終わる予定です。この「初めてのくずし字で読む百人一首」は、立川市教育委員会との共催で行われており、100名が定員ですが、毎年約3倍ほどの倍率で応募がある人気講座です。

なお、今年度から「初めてのくずし字で読む百人一首」と、「初めての」の言葉を付けました。2015・2016年度は「くずし字で読む百人一首」というタイトルでした。例年、ある程度くずし字に習熟した人が、初回の講座で、自分にとってはレベルが低いと感じて来なくなる場合があることがアンケートから判明していました。先ほど言いましたように、毎年約3倍ほどの倍率があるわけです。途中で来なくなる人がいるということは、その人のために落選した人が当然いるので、非常にもったない話です。そこで「初めての」と付けて、“これは初心者向けだから、ある程度難しいものを読みたい人には向きません”と牽制をかける意味で、「初めての」と付けました。あと残すところ1回で百首が終わりますが、その最終回が私の担当です。毎年メンバーを変えながらリレー講義でやっていますが、百人一首が題材であり、私は和歌が専門だから毎年担当しています。寺島恒世先生が昨年度でご退官になりましたので、今年度は私が最終回を務めることになっています。

次は、展示ギャラリートークというものがあります。これは毎月1回程度行っているものです。1階の展示室で、教員が約45分かけて解説をしながら展示を見ていただきます。これももう既に、5月から始まっています。来月から「伊勢物語のかがやき一鉄心斎文庫の世界」という特別展示が始まるのですが、その時に私もギャラリートークをする予定です（注：会期は2017年10月11日～12月16日、小山のギャラリートークは11月2日（木）だった）。

「初めてのくずし字で読む百人一首」と展示ギャラリートークは、私自身は今年度まだ担当していませんが、この次から、私がすでに行ったものについてお話していきます。

私が関わった一般向けの企画として、今年度最初のものは、6月27日に文部科学省研修生への解説でした。これは正式名称を「文部科学省関係機関職員研修生実地研修（見聞型研修）」というもので、毎年大体この6月下旬頃に立川4機関を研修生が訪問する、文部科学省で採用された新人が受ける研修です。この日の午後に4機関の各研究所の概要を事務官から説明し、その後に特別講義があり、4機関の見学を行います。当館では通常展示「書物で見る日本古典文学史」を見学していただきました。1グループ約30名で3グループに分かれて見学します。展示解説を、恋田知子助教が2回、私が1回担当しました

この「書物で見る日本古典文学史」は、上代から近代までの作品を古典籍で展示して、昔の人が触れて読んだ形で古典籍・古典文学史を見ていくという展示です。この時に来て下さった方は、文部科学省に採用された、いわゆるエリートの方たちですから、知的好奇心も理解力も非常に高い方ばかりが相手でした。だから、20分で解説するという手際の良さや、どういふトピックで話をするかという課題はありましたが、あまり苦勞しないで済みました。こうしたものからスタートしています。

2. 高校生向け研究者トーク

あまり苦労しなかったという意味で、次に、8月1日にあった兵庫県立兵庫高等学校相手のミニ講義の話をします。

この兵庫県立兵庫高等学校は、毎年夏8月上旬に、「東京みらいフロンティアツアー」の一環として立川4機関を見学に行らっしゃいます。この「東京みらいフロンティアツアー」のような企画が組まれていることに顕著ですが、兵庫高等学校は2015年度からスーパーグローバルハイスクールに選定されている高校です。偏差値68～73の公立進学校で、兵庫県下の公立高校としてはトップクラスの高校です。この高校1年生約40人が聞いている前で、4機関の教員が各20分間ミニ講義を行いました。私がトップバッターで話をして、あと国語研、地球研、統数研の順でミニ講義をしました。生徒さんたちは国文研で、通常展示「書物で見る日本古典文学史」を入口敦志准教授の解説で見学してから、この講義を聞いています。

兵庫県立兵庫高等学校のミニ講義をすることになった時、何の話をしようかと考えました。時間はたった20分しかありません。20分は短いです。長々とトピックを話すことはできません。課題はもう一つあり、先ほど言いましたように、当館では今、歴史的典籍NW事業の成果発信をしなくてははいけないのです。生徒さんたちは、単に研究者の話を聞くというだけですが、私としては、ただ単に「自分はこういう研究してます」と話をするのではなく、館の事業と絡めて話をしなくてははいけないという制約がありました。なので、画像を使わなくてはならない。当館が持っているインターネット公開している画像を使いながら話をしようということで、『百人一首』の話を画像を使いながらすることにしました。

出しましたのが、「初めてのくずし字で読む百人一首」のテキストにも使っている『錦百人一首あづま織』という江戸時代に出された版本の、業平のところです。



(図版1)

次に、右に『錦百人一首あづま織』、左に光琳かるたを並べて示し(図版1)、「この業平の二つの絵を見て同じところはどこかわかりますか?」と聞きました。そうしたら、高

校生は、「後ろに矢を差しています」や「烏帽子のところに飾りが付いてます」と答えてくれました。

「実は他にも一致点があります」という形で、次の絵を見せます（図版2）。



国文学研究資料館蔵
奈良絵本『伊勢物語』



国文学研究資料館蔵
伝中村芳中画「業平図」
※中村芳中：生年不詳、一八一九年没。

(図版2)

これは『百人一首』ではありませんが、業平の絵です。右が伝中村芳中画の「業平図」。左は奈良絵本の『伊勢物語』。この業平も見て、「どこが共通点か分かりますか」と問いかけました。答えは、着物の模様です。全て三重の菱形の格子の中に、四菱が描かれている、この着物の模様が全部一緒ですね、と見せました。三重の格子の中に四菱が置かれるこの模様は、今でも業平菱という名前で着物の文様になっています。いろいろな文様のサイトから拾ってきた図版も示しましたが、全部同じです。これが一体どうして業平菱と呼ばれているのか。業平がこの模様を好きだったかどうかは、当然分かりません。けれどもこれが業平菱と呼ばれているのは、昔の業平の絵を見た時に、業平がこの模様の着物を着ていることが多いから、この文様は業平菱と呼ばれていますという話をしました。

おそらくその源流は、江戸時代の初期に出版された嵯峨本の『伊勢物語』なのだろうと思います。嵯峨本『伊勢物語』は『伊勢物語』版本の中でも最初のものですが、これより後の絵入り本などは嵯峨本の絵を踏襲します。お手本になったわけです。お手本になった嵯峨本の中で業平は、三重の菱の中に四菱が描かれた模様の着物を着ています。

但しこれは、時代が下ると崩れてゆきます。今、普通に流通している『百人一首』の読み札を見ますと、確かに菱形の中に模様がありますが、きちんと業平菱で描かれた業平菱と比べると、かなり崩れた形です。けれど、なんとなく雰囲気だけは業平菱が残っていることが分かってもらえるのではないかと、現代のカルタも見てもらいました。

実は、話としてはここまでのつもりだったのですが、意外なところに業平菱が継承されているものがありました。杉田圭『超訳百人一首 うた恋い。』第2巻の表紙です。色は赤ですが、三重の菱形の格子の中に四菱という伝統的な業平文様で、『うた恋い。』の業平

の着物が描かれているのです。意味が分からなくなってしまう人にとっては、なんとなく菱形で描かれている模様なのですが、ちゃんと意味を分かって描いている人もいますよ、という説明をしました。

私としては、歌一首を細かく解釈してそれに関心を引くよりは、パッと見て分かる画像で見せた方がいいだろうと思って、この業平菱の話をしました。小野小町の着物の話もしましたが、中心はこの業平菱の話でした（注：その後、2017年10月8日にアキバ・スクエアで行われた大学共同利用機関シンポジウム 2017「研究者に会いに行こう！—大学共同利用機関博覧会—」の研究者トークでも、業平菱の話をした）。

後日、アンケートが返ってきました。私の講義については、女子男子ともに100%、「わかりやすかった」という回答でした。他の先生は「難しかった」という回答が多い人もいます。それを考えると、私の講義は「わかりやすかった」が100%ということで、まずまず良かったと思えました。あと、フリーライティングのアンケート結果でも、「国文学の研究がとても面白かったです。ありがとうございました！」と書いてくれたものもあったので、この20分の講義はそれなりに成功と言ってよかったと思っています。

ただ、私としては一つ、反省点があります。「わかりやすかった」が100%というのは、「難しかった」が多いのに比べると遥かにいいので、これでいいと言えば確かにいいのです。ただ、やはりもう少し専門的な話、噛み応えのある話をして良かったかとは、後で思いました。この業平菱のトピックは、一般的な中高生であれば理解できるだろうということで選びましたが、この時聴いていた高校生は、偏差値が68～73と非常に優秀な生徒たちです。聞き手の偏差値・理解力・知的好奇心を考えれば、もう少し難易度を高めに設定しても良かったのではないかと思います。私が研究者としてこういうことを面白いと思っている、という本格的なトピックを少しは入れた方が、聞いていた生徒たちも面白かったのではないかと思います。

ちなみに入口先生(ママ)の展示解説も非常に好評でした。「国文学研究所の資料館で聞いた話がとても面白かった」「国文学研究資料館の説明に興味を持ちました。面白いなと思えました」などのアンケート回答がありました。第1回目の研究会の時に、入口さんがどういう取り組みしていらっしゃるか、ご報告を聞いていた私は、さもありませんと思えました。

3. 小学生向けの古典普及活動①

今までお話したのは、文科省の新人研修であったり、偏差値70クラスの公立のトップレベル進学校であったり、非常に高い知識力と理解力のある人たちを相手にした話でした。ここからが小学生向けの古典教育の話です。

夏休みに入りますと、小中高校生や学校向けの広報活動が盛んになります。今年度、ちょうどその最初に当たったのが、7月28日の立川市キッズドリームチャレンジの取材でした。このキッズドリームチャレンジは、立川市の青年会議所が主催の職業体験企画です。記者の仕事を経験するという趣旨のもとに、この後8月1日に当館の新館長ロバートキャンベル先生のところ取材に来る、その事前学習としていらっしゃいました。キャンベル先生はご多忙ですので、取材のためにそれほど長い時間を取れません。なので、キャンベル先生にはキャンベル先生自身の取材をするということで、事前に、国文研の事業内容

や研究についての説明を私からするという趣旨でした。

当日は、小学校4年生の男子2人と女子1人と6年生の女子が1人、計4人が来館しました。子供たちだけではなく、付き添いの大人もいらっしゃいまして、主催の青年会議所の幹部3名、30代後半から40歳前後の男性3名が同行されました。

このキッズドリームチャレンジの取材があると聞いた時に、国文研の事業を説明し、展示室を見てもらう、この二つが柱になりますが、これだけでは子どもはついてこないと予想しました。そこで、事業説明と展示解説の間にくずし字を読む経験をしてもらい、昔の本を読むとはどういうことなのかを子どもたち自身にも体感してもらおうと考えて、簡単なくずし字のクイズを作りました。食べ物屋さんの看板でくずし字にチャレンジするというアイデアは、同僚の恋田知子助教のもので、当館で冬場に図書館の司書の方たちを対象に行っている日本古典籍講習会で、お店の看板でくずし字クイズをして、身近な所に今でも残っているという導入で使っていたのを参考にして、看板でくずし字のクイズを作りました。

これを子どもたちと一緒に解いて、くずし字を読む体験をした後、それでは展示室に行きましょうと展示室に行きました。展示室では、特設コーナーで「アーカイブズが語る近世後期の多摩地域」というミニ展示をしていたので、それを観てもらいました。「書物で見ると日本古典文学史」の通常展示もありましたが、敢えてこちらに誘導して解説しました。子どもたちも青年会議所の方たちも立川在住ですから、立川にゆかりのある歴史資料の方が、くずし字で書いた古典文学作品の本を見てゆくよりも面白いかと思ったからです。

歴史資料もたくさん展示してありましたが、最も関心を引いたのがARというデジタル展示です。ARはオーグメントリアリティ (Augmented Reality)、つまり拡張現実と呼ばれるもので、ARを用いたデジタル展示には、当館の情報系教員である北村啓子准教授が取り組んでいます。例えば、古文書の画像にタブレットをかざすと、古文書の翻刻がタブレットの画面に出てくる。もしくは、多摩地域の古地図がグーグルマップと重ね合わせてあり、古地図を拡大していくと、グーグルマップのストリートビューが表れてくる。多摩の古地図と現在の地図を合わせて、「さあ、僕が住んでいるところは昔はどういう地名だったのかな」とか「今私が住んでいる家の前に通っている道は昔もあったのかな」、そういうのを見られるのがARです。

立川キッズドリームチャレンジでくずし字のクイズをし、展示を見に行き、私がこの時感じたことが幾つかあります。子どもたち4人は、どちらかというとおとなしい子たちでした。大人たちが後ろからせつついて、やっと動くような子たちだったから余計にだったのですが、この「看板で読むくずし字」のクイズにしても、ARにしても、楽しんでくださったのは、子どもたち自身ではなく、むしろ同行の青年会議所の幹部3名の方たちでした。30代後半から40歳前後の男性のほうが楽しんでらっしゃったのです。特に地図がそうで、車を運転される方は地図を見慣れていますから、ずっとやってらっしゃいました。もちろん、大人自身が楽しむことで子どもの気持ちを盛り上げようとしてくださっていたという側面はあると思います。けれども、ARにしても、くずし字のクイズにしても、子どもたちにとっては、実際に手に取ったり、体験・体感できる経験のほうが楽しいし、必要なのではないかと考えたのが、この立川キッズドリームチャレンジの経験でした。

4. 小学生向け古典普及活動②

順番としては兵庫高校の次がこれでしたけれど、こども霞が関見学デーが8月2・3日の2日間ありました。これは、毎年霞が関の各省庁で行われている催しです。国文学研究資料館は文部科学省の省庁内で、人間文化研究機構6機関の一つとしてブースを出展しました。8月2日は、アーカイブズ系の宮間純一准教授と私と、企画広報係の係員1名の3名で行きました。3日は、私と企画広報係長と2人で行って対応しました。今年度は、2日間で計6,104名の参加者があったそうです。この6,104名は、もちろん子どもだけではなく、引率の親御さんも含んだ人数です。各ブースは長机二つ分で、長机には古典籍とプリントを置きました。この古典籍は、今西祐一郎前館長が、こういう時に子どもたちが触ってもいいように、早い話が、痛んだらもう捨ててもいいと、そのためにくださった古典籍です。あと、『源氏物語絵巻』と『南総里見八犬伝』の複製も持っていきました。例年、古典籍の現物と複製、それからちょっとしたクイズは持っていくのですが、今年はこれに付け加えて、先ほどお見せした看板クイズも持っていきました。

この時の反応についてまとめますと、くずし字のクイズを楽しんでいたのは、やはり子どもさんよりも親御さんだったと思います。子どもでくずし字クイズを楽しんでいたのは、比較的高学年の子どもたちでした。むしろ、子どもたちが楽しんでいたのは、たとえば複製の卷子本を広げたり巻き戻したりする、それから古典籍に触れて「うわあ、ふかふかしてる！」と言ったり、そういう実際に触れて実感する・体験することのほうが、子どもたちにとっては楽しかったようでした。

人間文化研究機構6機関全部がブースを出していて、そこにスタンプが置いてあります。6機関全てのスタンプを集めると、出口でお土産がもらえるので、短時間でスタンプだけをもらいにくる子どもも相当数いました。先ほど言いましたように、延べで6,100人を超える来訪者がありますので、1人1人の対応時間は本当に短いのです。ひたすら、私も企画広報係員も、「良かったらこれ解いてみてくださいね」とくずし字のクイズを渡し、「これは江戸時代の、今から2～300年前の本なので、良かったら触ってみてくださいね。今の本と質感が違うのが分かるでしょう？」という説明をずっと繰り返す状態でした。上級者バージョンとして『百人一首』のくずし字クイズも出しましたが、「僕、百人一首全部覚えてるよ」と言っていた男の子1人がこれにチャレンジして一所懸命に読んでいましたけれど、あとの子はほぼスルーでした。

けれども、中には非常に熱心に古典籍に見入ってるお子さんも数名いました。私たちに、『南総里見八犬伝』を読んだことがあるの」と話しかけてくれた女の子もいました。くずし字の成り立ちであるとか、その読み方について私たちが説明をしますと、それに対して関心を持ってくださる親御さんも多くて、やはり体験を導入にする大切さをこの催しで実感しました。

ちなみに、こども霞が関見学デーにいらっしゃるお客さんは、基本的には文部科学省であるとか、各省庁でお勤めの方の家族が中心だそうです。それはこの時初めて知ったのですが、となりますと、基本的には知的階層としては高いご家族が多いということになります。教育熱心な親御さん、もしくはおじいさま・おばあさまに連れられて子どもたちが来ていますので、こういう場所での一般向け広報活動といっても、学習意欲であるとか、意

識の高いご家族相手の催しであるという利点はありました。

5. 「読めるかな？ 書けるかな？ くずし字で遊ぶ百人一首」

7月末から8月頭にかけて2回、こういう形で小学生とじかに触れあって、反応を見ながら広報活動をする機会を持ちました。体験型の古典教育として、私がこの夏取り組んだのが、8月22日に江戸川区こども未来館で行った子ども教室です。テキストと変体仮名の一覧表とカルタの画像の三つを配りました。

テキストなどについては、追々ご説明しますが、そもそもこの話がどういう経緯で来たかというところからお話します。4月に江戸川区こども未来館の職員さんが当館に相談に見えて、夏休みの小学生向けの講座を開いてほしいという要望がありました。未来館の職員さんが、まず案を出してくださいました。第1回研究会でのご報告にありました、山下則子教授が文科省で小学生向けになさった『NARUTO -ナルト-』の講義。未来館の職員さんは、その『NARUTO -ナルト-』の講義が大変に好評だったということをお聞きになって、うちでもそれをやってもらえないかご提案がありました。それが無理であれば、今子どもたちには『妖怪ウォッチ』が流行っている。だから妖怪の話をしてもらいたいとおっしゃいました。三つ目の案として、当館でやっている「くずし字で読む百人一首」の講座の子ども向けをやってもらえないか。この三案を出されました。

私と企画広報係長と2人でご相談を受け、そこで考えました。『NARUTO -ナルト-』の話は山下先生にしかできません。山下先生は近世の草双紙などがご専門で、近世文学や絵画資料について大変造詣が深いので、『NARUTO -ナルト-』に描かれている絵の元ネタ、『児来也豪傑譚』などと比べて講義をしてくださいました。けれど、それは山下先生にしかできない話です。妖怪の話、これも確かに当館にはその適任者がいます。妖怪や『百鬼夜行絵巻』について講演されたこともある齋藤真麻理教授。それから絵巻を専門にしている恋田知子助教がいます。けれど、これもその2人にしかできない話です。私は、これから先、こういった依頼が来た時に、当館の誰か1人の教員の能力や専門分野に頼った話をその都度用意するのは、限界があると考えていました。しかし、一つ雛型を作っておき、誰がやっても同じようにできるようなコンテンツをこの機会に作ってしまいたいと思いました。だから、『くずし字で読む百人一首』の子ども向けなら、私が担当できます。だから私がします」とお答えして、私が担当することになりました。なので、この時に題材としたのが『百人一首』だったのは、ただ単に私の専門だからではなく、これから先、私じゃなくても誰が行ってもできるような雛型を作る上で、最も適した題材だと判断したからです。

『百人一首』でしますとお答えして、「時間はどれくらいですか」と聞いたところ、「1時間半から2時間です」と言われました。小学生相手に2時間というのは、非常に大変です。集中力が保ちません。もう一つ、職員さんから「子ども講座では、この後に広報が出て希望者が応募してきますが、文学系はあまり人気が無いんですよ」とお聞きしました。人気があるのは自然科学系。特に、夏休み明けに夏休みの宿題として提出できる工作ものに人気があるとのことでした。これは、私にもよく分かりました。

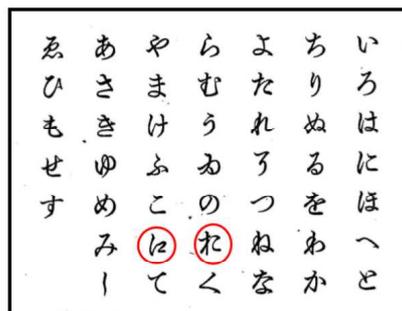
そこで私が考えたのは、2時間の内の半分から3分の2までは、子どもたちが手を動か

して何かを書いたり、作ったり、遊ぶ時間にするのがいい。それから、先ほどと同じですが、この企画は歴史的典籍 NW 事業の社会還元の一部として位置付けるということで、当館所蔵のデジタル画像を使おう。こうした条件を満たす内容として、くずし字を一通り説明したあとで、当館所蔵の百人一首のカルタ画像を使って、読み札を作ろう。それから、取り札は変体仮名で子どもたち自身に作ってもらって工作しよう。最後にみんなでカルタ取りしよう、と構想しました。

そうということで、「読めるかな？ 書けるかな？ くずし字で遊ぶ百人一首」というタイトルで開講しました。対象は、小学校4年生から6年生にしてほしいと、私から未来館にお願いしました。1年生から3年生はさすがに難しいと思いました。それから教室は、一つのテーブルにつき4人ないし5人ずつ座り、全部で20人から24人くらいだと聞ききました。それくらいがちょうどいいとお答えし、24人定員で小学校4～6年までという条件で募集をかけていただきました。結局、20人の応募がありました。当日2人が来られなかったので、結局18人で開講することになりました。

まず、くずし字とは何かという、そもそもの話からしなくてはなりません。このくずし字の話を、国会図書館のデジタルライブラリーから引っ張ってきた明治18年の活字を配って、この赤で丸をしている「お」と「え」が今使っているものとは違うよね、というところから、変体仮名の話を始めました(図版3)。私がくずし字とは何か、もしくは変体仮名とは何かということ子どもに説明する際に考えたのは、毛筆にはこだわらないということです。毛筆にこだわると書道になってしまいます。「筆で書かれたもの=変体仮名」ではないと子どもに思ってもらいたかったのです。変体仮名は大正時代まで使われています。最初に、明治時代の活字見本から変体仮名を見せるのは、そういう意図があつたことです。

1、くずし字って何？



これは、明治18年(1885)の活字で書かれた「いろは歌」。
いろは歌は知っていますか？

いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ
うゑのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす

右上から読んでみよう。
……「うゑのおくやま けふこえて」の「お」と「え」が、なんだか違う字になっています。

どうして「お」も「え」も、どうしてこんな字で書かれているのでしょうか？
そして、この字をどうすれば「お」「え」と読めるのでしょうか？

(図版 3)

2、くずし字を読んでみよう！

【練習問題・1】
食べ物屋さんの看板です。
何と書いてあるか、当てて下さい。

① う ぎ 蒲焼

② だ ん

③ 天 親子井 天井

④ う ん

(図版 4)

ちなみに『名探偵コナン推理ファイル 漢字と仮名の謎』（小学館、2011年）という本があります。この本の後半部の、変体仮名についてコナン君が解説しているところで、私が子ども教室で使った明治時代の活字が取り上げられています。これは、明治生まれのおじいさんが、変体仮名で書いてあるために自分の名前を誰にも読んでもらえない、という話から始まります。なので、毛筆にはこだわらず、形だけを取り上げて、変体仮名とは何かという説明をしました。

その次に、看板クイズの改定版です。キッズドリームチャレンジとこども霞が関見学デーで使って、これでは少し読みにくいという実感がありましたので、より簡単で読みやすいものをネット画像から拾ってきて作った改訂版です（図版4）。これで読みますと、すらすら答えが出てきました。やはりこちらのほうが読みやすいと強く感じました。

その次の段階として、「さあ、では今度はくずし字で自分の名前書いてみましょう」と、変体仮名一覧表を見ながら、自分の名前を書いてもらいました。普通に鉛筆書きです。ここに自分の名前を変体仮名で書いてみましょうという段階を一つ入れたのには理由があります。非常に単純なのですが、これは効果があると思います。

昨年度の冬休みに、小学生の甥の冬休みの宿題を手伝いました。その宿題の中に、読書感想文まではいかない読書日記を書くというものがあったので、先ほど挙げた『名探偵コナン推理ファイル 漢字と仮名の謎』を読ませました。その時に、「変体仮名で自分の名前を書いてみよう」と言って書かせますと、とても面白そうに書いていました。自分の名前というものは、非常になじみの深いものです。漢字で書くにしろ、平仮名で書くにしろ、片仮名で書くにしろ、それぞれの自分の名前の表記は1パターンしかありません。けれども変体仮名で書くと、自分でどの字を使うかを選べます。普段使わない変体仮名で書いた自分の名前は、まるで自分の名前ではないように見えます。常日頃から慣れ親しんだ自分の名前が、全く別のもののように見える。暗号みたいに見える。そういう新鮮さを実感できるということで、自分の名前を変体仮名で書く経験は良いのではないかと考えて、ここにも取り入れました。自分の名前はこう書くものなのだ、書かなくてはならないという固定概念を崩して、自分で選んだ仮名で書くことができることを体感してもらうのが目的です。

わざわざ何種類もの仮名を使い分けるということは、今の我々から見ると効率の悪い、あまり意味のないことのように見えます。けれども、何種類もの仮名を使い分ける意味は、デザイン的であるとか、見た目の面白さであるとか、そういった点にあるということも実感できるだろうということで、2パターン書いてもらいました。

さてこの後、くずし字で百人一首を読んでみましょうということで、業平の歌をまず読んでもらいました。やはり覚えている子がいますので、覚えている子がさらさらと読んでくれ、大変スムーズにいきました。

次に、百人一首の取り札を自分で書きます。子どもたちが書いたり、貼ったりしている台紙は、市販されている無地のカルタです。これは未来館に、事前に購入しておいてもらいました。普通の百人一首のカルタより二回りくらい大きいものです。そのサイズに合わせて画像を出力しました（図版5）。読み札はこれを切って無地のカルタに糊で貼るだけです。1枚につき4人分で、これを5種類、1～20番の歌のカルタです。1テーブルにつき、同じ札が重ならないようにバラバラの紙を配りました。テキストには、自分の歌は



どれで、どれを書けばいいのかを確認するために、1～20番の和歌本文を平仮名で書いて配りました。

取り札を作る際に、自分で選んだ変体仮名で書くことをやってもらったわけです。1テーブルにつき4人なので、実際に使ったに使ったのは1から16番まででした。いきなりぶっつけ本番で書くのは難しいので、まずはカルタと全く同じ大きさの練習用紙に練習して、それから本番を書いてみようという形でやってもらいました。楽しかったのは、カラーペンを活用して子どもたちが工夫していたことです。「黒で書かなくてはいけないなんてことは全然ない。自分の好きな色で書いたらいいからね」と言うと、ピンクで書いた子もいましたし、紫で書いた子、1句ずつ色を変えて3色使って書いた子もいました。蛍光イエローで書いてる

(図版 5) 子がいて、これは読めないなと思いましたが、蛍光イエローが好きだから、わざわざそれで書いたんでしょう、そういう子もいました。それぞれ楽しみながら書いてくれました。

時間配分として、くずし字の講座が大体45～50分で終了して、残り1時間をカルタ作りに使いました。私の予定では、カルタ作りが40分くらいで、20分はカルタ遊びをできるかと思っていましたが、結論から言いますと辿り着けなかったです。

その日に子どもたちが「発見カード」というリアクションペーパーを書いてくれました。原文のままなので文法的におかしいところもありますが、「今日、昔のひらがなもしりたのしかったです」(小4・女子)、「昔、書いていた、字が分かり、自分で書くことができたので良かったです」(小5・男子)、「むずかしい字がたくさんあって、昔の人はすごい!」と思いました。全部はよめないけれど少し読めるようになったのでよかったです。いろいろな字があっておもしろかったです」(小6・女子)、「昔使っていた文字の種類がたくさんあることがわかりました。また、くずし字を書くのは楽しいということがわかりました」(小6・女子)などの感想が書かれていて、楽しんでくれたのではないかと思います。

ただ反省点が残りました。私の事前予想と一番食い違ったのが、個人差です。それも取り札を書く個人差が、とても大きかったです。小学校5・6年の女の子で字がきれいな子は、本当に早く、あっという間に4枚書いて時間が余り、「時間が余ったんだったら、せっかくだから追加でやる?」と、もう1枚追加を渡した子も4～5人いました。けれども中には、本当に手間取る子がいました。なかなか書けなくて、集中力も続かず、ボランティアさんに「頑張って書こうね、書こうね」と言われても、なかなか書けない子がいました。

私もカルタづくりの間は、机間巡視でうろうろしながら、励ましたり、「うわあ、きれいに書けてるね」と褒めたり、子どもたちに声を掛けながら進めました。けれど、そうやって見ている中で、全然進まない、なかなか進まない子がいるのに気付きました。その子どもたちには下の句の14文字を全部変体仮名で書くのは困難なので、「普通の字で書いていいから、その中で二つか三つの字だけ変体仮名で書いてみようね」と目標を下方修正しました。そういう子が2～3人いました。後で聞いたところ、ここで国語研もカルタづくりをされたことがあるそうで、その時は1人2枚だったそうです。それで充分だったのかもしれませんが、4枚くらいサラサラ書けるというのは、大人の感覚であって、字を書くだけでもかなり苦痛を感じる子どもがいるということに、私は全く気が付いていませんでした。見ながら写すだけでもものすごく時間がかかるのです。なので、子どもたちが「書く」ことに対して覚える困難に想像が及んでいなかったというのが、最大の反省点です。

なので、発見カードでも、「書くのがむずかしかった」(小4・男子)「くずし字を書くのがとてもむずかしかった」(小4・女子)「くずし字の書かたがとてもしんどかったです。(笑笑、、、)」(小4・男子)と、小学校4年生の子が書いています。5・6年生になると、そういう反応はほとんどありませんでしたが、4年生の子たちは男の子も女の子も苦痛だったようです。変体仮名を書くことが難しかった理由の一つは、変体仮名の一覧表を配って、この字を真似して書きなさいと指示しただけだったということもあります。もっと起筆や筆順が分かるものを用意したほうが良かったのも、反省点です。それに使える良い資料が見つからなかったという事情もありますが、形だけ真似しなさいというのは、かなり酷な要求でした。

この子ども講座ではいくつかのことを心掛けました。最初に言いましたように、これは第1回研究会の実践編だと思って取り組みましたので、あの時に山下先生や入口先生、久保木さんがおっしゃっていたことを振り返りました。その中で、山下先生からの注意点として非常に印象的だったのが、子ども相手に話をする時には、体や目線を不用意に動かしてはいけないということでした。体を不用意に動かしたり、ゆらゆらさせたり、目線が動くと、子どもたちの注意がその動きでそれとおっしゃっていました。その点には、気を付けたつもりではありますが、実際にどこまでできていたのかは、当日に撮影したビデオを見て後で考えようと思っています。また、子ども相手の時には、問い掛けて答えを引き出すことが絶対に必要だと思いましたので、それは意図的にするようにしました。質問に答えてもらって参加型にするのは必須だと思います。あと、机間巡視しながら、子どもたちの様子や進行状況を見る。それだけではなく、子どもたちの素直な声を聞こうと思って、できるだけ気さくに「どう？」と聞きました。子どもたちの「しんどーい」とか、「もうつらーい」という言葉を聞いて、そこで無理に「いやいや、そんなこと言わずに頑張りなよ」と言うのではなく、「何がしんどいの？」とか、先ほど言いましたように目標を下方修正して、「じゃあ全部を変体仮名で書かなくていいよ」とか、もしくは「下書きは飛ばしても構わないよ。いきなり書いてもいいからね」とか、臨機応変に子供の進行状況や集中度合い、それから能力によって変える必要があると思いました。

先ほどから目標を下方修正すると言っていますが、私が下方修正したのは、この時間内にやり切らないといけないからです。子どもたちがやり残して家に持って帰って続きをやるかと言えば、まずやらないと思います。だから、この時間の中でとにかく完結させるこ

とが私の最大の目標でした。だから多少ミスしようが、出来がきれいでなかろうが、ほとんどが今の平仮名で書かれていようが、それは構いません。とにかくこの時間内に仕上げることが重要だと思いましたので、そのために下方修正もしたわけです。終わったら、たとえよたよたした字であろうが、多少失敗してようが、「よく頑張ったね」「きれいに書けたね」と言葉を掛けて、達成感を損なわず、満足した気持ちを保てることを心掛けました。

結びに

今回作ったテキストは、私個人のものとしてではなく、「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」の成果として館から PDF でダウンロードしてもらえようように出そうと考えています（注：その後、2018年4月に国文学研究資料館ホームページがリニューアルした際、「古典に親しむ」「くずし字を読む」<https://www.nijl.ac.jp/koten/kuzushiji/>のコーナーに取り入れられた）。それを今後、色々な方にブラッシュアップして使ってもらえれば、それでいいと思っています。このように子どもたちと接してみて、純粋に楽しみながら、面白がりながらやってくれる子どもが多かったので、私も一緒にやっていて楽しかったです。

先ほど当館の「くずし字で読む百人一首」の話をしましたが、倍率が3倍といっても、その9割はシルバー世代、60代以上のリタイアの方がほとんどです。平日の昼間に開催している以上、お勤めの方は来られないという事情もありますが、そういうシルバー世代のお客さまを大事にしなくてはいけない一方で、子どもたちに向けて、面白いでしょうか？ 楽しいでしょうか？ というのを開陳してゆくことで、少しでも関心を持ってもらえたらいいなと考えながらやっています。

私の今年度の企画広報の仕事は続きますが、この夏の経験は本当に私にとっても非常に良い経験になりました。短い期間に集中してやったことで、課題を見つけてそれを生かすということが、3回の子どもの向けの講座でできたように思っています。私からの報告は以上です。どうもありがとうございました。

(図版)

- 1 『錦百人一首あづま織』国文学研究資料館蔵（タ 2-213） DOI 10.20730/200007766
- 2 伝中村芳中画『業平図』国文学研究資料館蔵（98-1066） DOI 10.20730/200024771
『伊勢物語 奈良絵本』国文学研究資料館蔵（98-221）
- 3 『活字紋様見本』国立国会図書館蔵（367-38） DOI 10.11501/853858
- 5 『百人一首カルタ』国文学研究資料館蔵（ヤ 8-331） DOI 10.20730/200020349